

# ひとりで遊んでいる子どもの社会的行動特徴 ——静的遊びについて——

広島大学大学院教育学研究科 日本学術振興会特別研究員 淡野 将太

## Social Behavior of Children Playing Alone : In the Case of Solitary Passive Play

Hiroshima University

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science TANNO, Syota

### 要 約

本研究は、静的遊びを多く示す子どもの社会的行動特徴を記述した。保育者用遊び評定リストにおける静的遊び得点が高い幼児7名（男児5名，女児2名，平均月齢 = 63.00,  $SD = 3.46$ ）を観察対象とした。対象児を登園から自由遊び時間が終了するまで観察した。観察から，静的遊びを多く示す子どもの社会的行動特徴として，次の3点が明らかになった。a) 静的遊びを終えた時に仲間を誘って遊びを展開する。b) 共に遊んでいた仲間が遊びから離れてひとりになっても，ひとり遊び（i.e., 静的遊び）として遊びを継続する。c) 仲間から遊びの勧誘を受けた時，仲間の遊びへの勧誘である場合は断って静的遊びを継続し，自分の遊びへの仲間入りである場合は受容して遊びを展開する。

**【キー・ワード】 非社会的遊び，幼児，変化プロセス，社会的行動特徴**

### Abstract

This study describes social behavior of children who often engage in solitary passive play. Participants were 7 children (5 boys and 2 girls, mean age = 63.00 months,  $SD = 3.46$ ) who were highly rated by their teachers to engage in solitary passive play. The author observed children during free play. Results show following features: a) children solicit peers and develop play together when they finish solitary passive play; b) children continue their play as nonsocial play (i.e., solitary passive play) though peers leave children alone; and c) when children are solicited to play together by peers, children refuse it and continue their solitary passive play in the case that new play is peers' play and children accept it and develop play together in the case that peers affiliate children's play.

**【Key Words】 nonsocial play, preschool children, change process, social behavior**

## はじめに

非社会的遊び (nonsocial play) は、周囲に遊び可能な相手がいる状況において、社会的相互作用の見られない遊びと定義される (Coplan, 2000)。例えば、教室内にたくさんの仲間がいるにも関わらず、幼児がひとりでおりがみをする、という遊びである。

非社会的遊びは、沈黙遊び (reticent play)、静的遊び (solitary passive play) および動的遊び (solitary active play) の3形態に分類される。沈黙遊びは、何もしていない行動 (unoccupied behavior) と傍観者の行動 (onlooker behavior) から構成され、他者の遊びに参加することなく見つめたり目的もなくあたりをうろうろしたりする遊びである。静的遊びは、構成的遊び (solitary constructive play) と探索的遊び (solitary exploratory play) から構成され、積み木を組み立てたり物事について調べたりする遊びである。動的遊びは、機能的遊び (solitary functional play) と劇的遊び (solitary dramatic play) から構成され、ボールやブランコを使った遊びや見立て遊びである。

## 非社会的遊び研究の概要

研究者は、子どもが各非社会的遊び (i.e., 沈黙遊び、静的遊び、動的遊び) に従事する割合を測定し、個人特性や適応指標との関連を検討してきた (Asendorpf, 1990, 1991; Coplan, 2000; Coplan, Gavinski-Molina, Lagace-Seguin, & Whichmann, 2001; Coplan, Prakash, O'Neil, & Armer, 2004; Coplan & Rubin, 1998; Coplan, Rubin, Fox, Calkins, & Stewart, 1994; 大内・櫻井, 2005; Rubin, 1982; Rubin, Coplan, Fox, & Calkins, 1995; Rubin, Hymel, & Mills, 1989; Rubin & Mills, 1988; Rubin, Watson, & Jambor, 1978; Spinrad, Eisenberg, Harris, Hanish, Fabes, Kupanoff, Ringwald, & Holmes, 2004)。これらの研究は概して、ひとりで遊んでいる子どもはなぜひとりで遊んでいるのか、どのような社会的適応状態にあるのか、という問題に対して検討を行ってきた。また、縦断研究や男女差の検討も組み込み、非社会的遊びに従事する割合の持続性や男女の非社会的遊びの同一性および差異性を検討してきた (cf. 大内・櫻井, 2005; 2008)。

一定の成果を獲得した非社会的遊び研究は現在、研究の継続を目的化することなく、サンセット方式的流れの中にある。“ひとりで遊んでいる子どもはなぜひとりで遊んでいるのか、どのような社会的適応状態にあるのか” というテーマにおいて残された検討課題は、先行研究が検討しなかった部分の補完的検討もしくは対立する知見の再検討となっている。そのため、基礎的知見の信頼性を高める必要性は認識されているが、テーマに対する主要な成果が得られた現在は、終息に向かっていると言える。

## 適応的観点からの非社会的遊び研究

非社会的遊びについて適応的観点から検討を行う研究が提出されている。大内・櫻井 (2008) は、幼児の非社会的遊びと社会的スキルの関連を検討している。これは、非社会的遊びと学習されること

が前提にある社会的スキルの関連を示すことで、孤立しがちな幼児の集団との関わりを増やそうとする際、不足している社会的スキルを学習させることで介入が可能になるためである。直接的介入によって変容させることを前提としていなかった先行研究と比較すると、大内・櫻井（2008）の研究は、教育臨床の示唆に富む知見の獲得を目指した点において前衛的である。

淡野（2008）は、幼児の非社会的遊びの変化プロセスを検討している。非社会的遊びから社会的相互作用に変化する際の働きかけに着目し、働きかけが非社会的遊びに従事している幼児から行われることが多いのか、それとも他者から行われることが多いのかを検討している。これは、非社会的遊びから社会的相互作用が成立するプロセスを検討するためである。各非社会的遊びにおける働きかけのケース数について二項検定を行った結果、静的遊びについては、非社会的遊びに従事している幼児からの働きかけが他者からの働きかけよりも有意に多かった。一方、沈黙遊びおよび動的遊びにおいては、有意差が見られなかった。この結果は、静的遊びについては、非社会的遊びに従事している子どもからの働きかけによって社会的相互作用が開始しやすいことを示している。また、静的遊びのケースには、完成させた折り紙をクラスメイトに見せることによって相互作用が行われるケースや絵本を読み終えて他の遊び集団に仲間入りすることで相互作用が開始するケース、また、積み木遊びを終えてクラスメイトを新しい遊びに誘うことで相互作用に発展するケースなどが確認されていた。以上の知見は、静的遊びに従事している幼児は、自分の遊びに満足し、遊びを終えた時に他者との遊びを展開することを示唆している。

## 本 研 究

本研究は、静的遊びを多く示す子どもの社会的行動特徴を記述する。淡野（2008）では、イベントサンプリング法によって非社会的遊びが確認された時点で観察を開始し、検討を行っていた。そのため、非社会的遊びを多く示す子どもが重複して観察対象（最大5回）となることがあった。本研究では、子どもの非社会的遊びについて保育者が評定を行い、静的遊びを多く示す子どもに観察対象を限定する。

## 方 法

### 研究対象児

広島県内にある保育園において研究を行った。4歳児のaクラス33名（観察開始時平均月齢 = 61.46,  $SD = 3.73$ , 月齢範囲 = 55-67）およびbクラス31名（観察開始時平均月齢 = 60.87,  $SD = 3.26$ , 月齢範囲 = 55-66）の幼児について、担任の保育者が保育者用遊び評定リスト（大内・佐藤・櫻井, 2008）に回答した。保育者用遊び評定リストは、Coplan & Rubin（1998）のPreschool Play Behavior Scaleを参考に、日本における研究に適合させて作成されたものである。保育者用遊び評定リストは、沈黙遊び4項目、静的遊び4項目、動的遊び4項目および集団遊び6項目の合計20項目で構成される。評定は5段階評定法（まったく見られない：1、ほとんど見られない：2、ときどき見られる：3、よ

く見られる：4，非常によく見られる：5）であった。各クラスにおいて静的遊び得点が高い幼児を対象とした。aクラスでは合計得点14の1名と合計得点13の3名，bクラスでは合計得点12の1名と合計得点11の2名，合計で7名（男児5名，女児2名，平均月齢 = 63.00,  $SD = 3.46$ ）を観察対象とした。

### 手続き

観察者の立場を取り，自由遊び時間の自然観察を行った。観察場所は，教室内に限定して行った。対象児を登園から自由遊び時間が終了するまで観察した。観察記録は筆記によって記録した。

## 結 果

観察によって各対象児1ケース，合計7ケースを記録した。登園から自由遊び時間が終了するまでの対象児の行動を以下に示す。

### ケース1：女児・月齢63ヵ月

ひとりで机の上でおりがみを始める。最初のおりがみを完成させると，新しいおりがみを折り始める。テープでとめる場合などには，隣でおりがみをしているクラスメイトに協力してもらって折り進める。他の遊びをしているクラスメイトから遊びに誘われるが，誘いを断っておりがみを継続する。隣でおりがみをしていたクラスメイトが机から離れ，他の遊びを始めるが，ひとりでおりがみを継続する。しばらくして，離れたクラスメイトが隣に戻ってくる。そのクラスメイトがおりがみへの仲間入りを求め，2人でおりがみを展開する。10分ほどかけて完成させる。もう一度，クラスメイトが離れる。ひとりでおりがみを継続し，完成させる。完成させたおりがみに絵を描き始める。

### ケース2：女児・月齢66ヵ月

ひとりでままごとを始める。他の遊びをしているクラスメイトを誘い，2人でままごとをする。スプーンとフォークを渡し，料理を振舞う。その後，クラスメイトがままごとから離れ，他の遊びを始めるが，ひとりでままごとを継続する。今度は別のクラスメイトを誘い，2人でままごとをする。スプーンとフォークを渡し，料理を振舞う。近くに来たクラスメイトがままごとへの仲間入りを求め，3人でままごとを展開する。その後，ままごとを継続するクラスメイトを残してままごとから離れ，ひとりで工作を始める。紙を丸めて棒を作る。棒を作り終わると，ままごとに戻り，3人でままごとを再開する。しばらく継続し，ままごとを終え，工作した棒を持って保育者に見せに行く。保育者の近くにある机で，新しい棒を作り始める。棒作りを終え，お絵かきをはじめ。机の近くにいたクラスメイトを誘い，2人でお絵かきを継続する。

### ケース3：男児・月齢65ヵ月

ひとりで積み木を始める。積み木を水平に並べたり，垂直に高く積み上げたりして遊ぶ。その後，近くで積み木をしていたクラスメイトに話しかけ，2人で協力して高く積み上げる。どのようにすれ

ばバランスよく積み上げられるか試行錯誤しながら遊ぶ。積み木を終え、机に移動し、ひとりで工作を始める。紙で棒を作る。近くにいたクラスメイトと話をしながら作る。棒を完成させ、クラスメイトや保育者に見せに行く。その後、工作していたクラスメイト2人と3人で新しく棒作りを始める。

#### ケース4：男児・月齢56ヵ月

工作していたクラスメイトに加わり、3人で工作する。紙箱をつなげたり、紙箱におりがみを貼ったりする。クラスメイトから離れ、ひとりで箱で遊ぶ。少ししてクラスメイトのいるところに戻り、クラスメイトと3人でロボットを作り始める。2人のクラスメイトがロボット作りから離れるが、ひとりで続ける。その後、2人のクラスメイトが戻り、3人での工作が再開する。約15分間、工作を継続する。ロボットが完成した時点で工作から離れ、ひとりで積み木で遊び始める。しばらく継続した後、積み木遊びを終え、再度クラスメイトとの工作に戻る。

#### ケース5：男児・月齢60ヵ月

ひとりで工作を始める。紙箱を切って造形する。他の遊びをしているクラスメイトから2度に渡って遊びに誘われるが、それを断り、工作を継続する。その後、積み木で遊んでいたクラスメイトを誘い、2人で一緒に工作を始める。

#### ケース6：男児・月齢66ヵ月

工作しているクラスメイトに加わり、2人で剣を作る。作った剣を持ち、クラスメイトと教室内を走り回る。その後、新しく剣を作り、同時におりがみも始める。新しくクラスメイトが加わり、3人で剣作りとおりがみをする。3人で教室内を走ったりしゃべったりして遊ぶ。

#### ケース7：男児・月齢65ヵ月

パズルで遊んでいたクラスメイトに仲間入りし、2人でパズルをする。自由遊び時間が終わるまで約25分間パズルを継続する。

## 考 察

ケース6およびケース7は、ひとり遊びを示さず、仲間との遊びに終始した。静的遊びからの社会的相互作用の成立プロセスが検討できないため、2つのケースは考察対象から除外する。

ケース1から5ではいずれも、観察対象児は静的遊びを中心に遊びを展開した。社会的行動特徴として、次の3点があげられる。a) 静的遊びを終えた時に仲間を誘って遊びを展開する(ケース2, 3および5)。b) 共に遊んでいた仲間が遊びから離れてひとりになっても、ひとり遊び(i.e., 静的遊び)として遊びを継続する(ケース1, 2および4)。c) 仲間から遊びの勧誘を受けた時、仲間の遊びへの勧誘である場合は断って静的遊びを継続し(ケース1および5)、自分の遊びへの仲間入りである場合は受容して遊びを展開する(ケース1)。

これらの社会的行動特徴についての考察は、社会的無関心の知見 (social disinterest: Coplan et al., 2004) および静的遊びの変化プロセスの知見 (淡野, 2008) が有用である。すなわち、ひとりで遊んでいる、という一見すると孤立した状態にある静的遊びは、物体への関心の高さおよび社会的なことへの関心の低さからひとりで遊んでいる状態にある。また、自分の遊びに満足し、遊びを終えた時には他者との遊びを展開することが示唆されている。そのため、仲間を誘って遊びを展開する時はひとり遊びを終えた時であり (特徴 a)、仲間が遊びから離れても、ひとり遊びとして遊びを続け (特徴 b)、遊びの途中で他の遊びに誘われた場合は断り、自分の遊びへの仲間入りを要求された場合は受容して遊びを展開する (特徴 c)、と言える (ただし、ケース 2 は、当初はひとりで遊んでいたが、2 人で展開していたままごとへの仲間入りであるため、特徴 c には該当しない)。

幼児の非社会的遊びと社会的スキルの関連を検討した大内・櫻井 (2008) では、4 歳児における静的遊びの高さは、女兒においては協調スキルの低さと関連し、男児においては卒園直前時点の主張スキル (e.g., 友だちをいろいろな活動に誘う) の低さを予測した。この結果から、女兒は、仲間関係が安定した時期、仲間と協調して同じ遊びをすることができず、1 人でお絵かきや製作、周囲の探索をして遊んでいることが推察され、男児については、ひとりで製作などに没頭している場合であっても、そのままにしておく、十分な主張スキルが獲得されないまま卒園を向かえる可能性が示唆されている。協調スキルの観点から見ると、本研究のケース 1 の女兒は、仲間からの遊びの勧誘を断って静的遊びを継続した点において協調スキルが低いと言える。しかし一方で、自分が行っていた遊びであるおりがみにおいては仲間と共に協調して遊んでいる。また、主張スキルの観点から見ると、本研究のケース 4 の男児は、2 人の仲間がロボット作りから離れてもひとりで遊びを継続した点において主張スキルが低いと言える。しかし一方で、登園直後には 2 人の仲間の遊びに自分から仲間入りをし、箱での遊び (i.e., 静的遊び) を終えた後は自分から仲間入りしている。静的遊びを多く示す子どもには、大内・櫻井 (2008) が示すように社会的スキルの低さが見られる一方で、本研究のように興味の対象によっては社会的スキルの高さが見られる。これは、静的遊びを多く示す子どもの社会的行動特徴と言えるだろう。

静的遊びに従事する頻度は、幼児期においてはネガティブな感情や不安の表出と関連が示されていない (Coplan et al., 1994) 一方で、児童期中期においては孤独感や抑うつとの関連が示されており (Rubin et al., 1989)、そのまま継続すれば幼児期以降の発達段階において社会的不適応となる可能性がある (大内・櫻井, 2008)。そのため、大内・櫻井 (2008) の非社会的遊びと社会的スキルの関連に関する知見に基づいた社会的スキル訓練は、介入方法のひとつとして有用である。

## 研究のまとめ

非社会的遊びの変化プロセスを検討した淡野 (2008) は、非社会的遊びから社会的相互作用に変化する際の働きかけに着目して検討を行い、静的遊びについては、非社会的遊びに従事している子どもからの働きかけによって社会的相互作用が開始しやすいことを明らかにした。そして、静的遊びに従事している幼児は、自分の遊びに満足し、遊びを終えた時に他者との遊びを展開することが示唆され

た。澁野 (2008) の知見を受けて本研究は、静的遊びを多く示す子どもの社会的行動特徴を記述した。そして、静的遊びを多く示す子どもの社会的行動特徴として、次の 3 点が明らかになった。a) 静的遊びを終えた時に仲間を誘って遊びを展開する。b) 共に遊んでいた仲間が遊びから離れてひとりになっても、ひとり遊び (i.e., 静的遊び) として遊びを継続する。c) 仲間から遊びの勧誘を受けた時、仲間の遊びへの勧誘である場合は断って静的遊びを継続し、自分の遊びへの仲間入りである場合は受容して遊びを展開する。

## 引用文献

- Asendorpf, J. B. (1990). Development of inhibition during childhood: Evidence for situational specificity and a two-factor model. *Developmental Psychology*, **26**, 721-730.
- Asendorpf, J. B. (1991). Development of inhibited children's coping with unfamiliarity. *Child Development*, **62**, 1460-1474.
- Coplan, R. J. (2000). Assessing nonsocial play in early childhood: Conceptual and methodological approaches. In K. Gitlin-Weiner, A. Sandgrund & C. Schaefer (Eds.), *Play diagnosis and assessment*. New York: Wiley. pp. 563-598.
- Coplan, R. J., Gavinski-Molina, M., Lagace-Seguin, D. G., & Whichmann, C. (2001). When girls versus boys play alone: Nonsocial play and adjustment in kindergarten. *Developmental Psychology*, **37**, 464-474.
- Coplan, R. J., Prakash, K., O'Neil, K., & Armer, M. (2004). Do you "want" to play? Distinguishing between conflicted shyness and social disinterest in early childhood. *Developmental Psychology*, **40**, 244-258.
- Coplan, R. J., & Rubin, K. H. (1998). Exploring and assessing nonsocial play in the preschool: The development and validation of the preschool play behavior scale. *Social Development*, **7**, 72-91.
- Coplan, R. J., Rubin, K. H., Fox, N. A., Calkins, S. D., & Stewart, S. L. (1994). Being alone, playing alone, and acting alone: Distinguishing among reticence and passive and active solitude in young children. *Child Development*, **65**, 129-137.
- 大内晶子・櫻井茂男 (2005). 就学前児における非社会的遊びと社会的適応との関連 筑波心理学研究, **30**, 51-61. (Ohuchi, A., & Sakurai, S.)
- 大内晶子・櫻井茂男 (2008). 幼児の非社会的遊びと社会的スキル・行動問題に関する縦断的検討 教育心理学研究, **56**, 376-388. (Ohuchi, A., & Sakurai, S. (2008). Nonsocial play, social skills, and problem behavior in kindergarten children: A longitudinal study. *Japanese Journal Educational Psychology*, **56**, 376-388.)
- 大内晶子・佐藤広英・櫻井茂男 (2008). 幼児の非社会的遊びと自己制御機能との関連 (1) ——保育者用遊び評定リストを用いた検討—— 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 1130. (Ohuchi, A., Sato, H., & Sakurai, S.)

- Rubin, K. H. (1982). Nonsocial play in preschoolers: Necessary evil? *Child Development*, **53**, 651-657.
- Rubin, K. H., Coplan, R. J., Fox, N. A., & Calkins, S. D. (1995). Emotionality, emotion regulation, and preschoolers' social adaptation. *Development and Psychopathology*, **7**, 49-62.
- Rubin, K. H., Hymel, S., & Mills, R. S. L. (1989). Sociability and social withdrawal in childhood: Stability and outcomes. *Journal of Personality*, **57**, 237-255.
- Rubin, K. H., & Mills, R. S. L. (1988). The many faces of social isolation in childhood. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **6**, 916-924.
- Rubin, K. H., Watson, K. S., & Jambor, T. W. (1978). Free-play behaviors in preschool and kindergarten children. *Child Development*, **49**, 534-536.
- Spinrad, T. L., Eisenberg, N., Harris, E., Hanish, L., Fabes, R. A., Kupanoff, K., Ringwald, S., & Holmes, J. (2004). The relation of children's everyday nonsocial peer play behavior to their emotionality, regulation, and social functioning. *Developmental Psychology*, **40**, 67-80.
- 淡野将太 (2008). ひとりで遊んでいる子どもはどのように遊びを変化させるのか——自由遊び場面における非社会的遊びの変化プロセス—— 発達研究, **22**, 263-270. (Tanno, S. (2008). How do preschool children playing alone change over their play? :Change process of nonsocial play in free play. *Human Developmental Research*, **22**, 263-270.)

## 謝 辞

論文作成にあたりご指導・ご助言いただきました広島大学大学院教育学研究科の前田健一教授に感謝いたします。